

# 「いじめはみんなの問題」尾木ママが授業

尾木直樹さんが横浜市立川上北小でオーサービジット



㊦みんなで尾木直樹さんと記念撮影  
㊧児童たちの中に入って語りかける  
㊨ベルマークのコーナーも

今年度で創立50周年を迎えた横浜市立川上北小学校(森山豊実校長、児童808人)に1月21日、教育評論家の尾木ママこと尾木直樹さんが訪れました。本の作者(オーサー)が全国の学校を訪れる朝日新聞の人気企画「オーサービジット」のベルマーク版授業のためです。

同校PTA会長の難波裕子さんが2年前から暖めていた企画。4年生以上の児童431人と100人近い保護者が待つ体育館に、「どうも、どうも」と手を振りながら尾木さんが入場してきました。

尾木さんが事前に児童にアンケート調査したところ、友だち関係やいじめの悩みが多かったそうです。尾木さんは子

どもたちにマイクを向けて聞きます。「どういう時にいじめたくなる？」

次々に手を挙げる子どもたち。「ムカつくとき」「相手がズルしたとき」「他人に悪口をいわけたとき」「おこられたとき」「挑発されたとき」……。「ちょっとストップ」と尾木さん。「ムカつく、いらつくという感情の正体って何だろう」

いじめの原因は70%がストレス、という研究があることを尾木さんは紹介します。「僕たち人間は、傷付いた時やあせっている時など、様々な時にイライラします。こんなときにストレスを発散させる手段が、いじめです」

尾木さんは、だれもがいじめの加害者

と被害者の両方になる可能性があることを強調します。「これは全員の問題です。だれの心の中にも、いじめる自分といじめられる自分がいます」。

では、どうしたらいじめのない学校にできるのか。子どもたちも発言します。「がまんする」「自分がいやなことはしっかり言う」「軽い運動をする」「ずっと笑ってる」。それを受けて尾木さんは言います。「楽しい学校になればいいんです。いじめをおさえる、というより、楽しい学校、楽しいクラスにする。そうすれば、いじめはなくなります」。

そのためには、物事を異なる枠組みでとらえる「リフレーミング」が大事だと

のこと。「怒りっぽい人」ではなく「人のダメなところを注意できる人」、「忘れっぽい人」ではなく「何か他に楽しいことをいっぱい考えている人」等々。「みんな、自分の弱点を、ひっくり返してみてはどうか」

尾木さんは、児童の間を歩き回りながら2時間近く語り続けました。最後に、児童代表の浅井那結花さん(6年)と山口まりかさん(5年)がお礼の言葉と花束を贈りました。山口さんは「テレビで見た、まじめで堅いというイメージと違い、楽しい感じの人だった。自分を大切にするという話が心に残った」と話していました。

## 5年で100万点を積み上げ

1300万点 高松市立栗林小学校

1961年から運動に参加している高松市立栗林小学校(武智直校長、1176人)の集票点数が昨年末、累計で1300万を超えました。香川県では初。四国でも指折りの大規模校で、2013年から5年で100万点を積み上げました。

PTA広報部の8人がベルマークを担当しています。大きな特徴は、子どもたちが毎月マークを持ち寄った際、自分たちで大まかに6分類すること。多く集まる「キューピー」と「日清食品」の2グループと、その他を番号順に4グループに分け、各学級にある回収箱に入れます。児童が自ら仕分けすることで参加意識を高め、PTAの負担を軽減しています。

回収箱は牛乳パックを色とりどりのフェルトで飾り付けたもので、数年ごとに6年生が卒業記念として手作りしているそうです。

こうして集まったマーク類を、広報部の担当者が年6回仕分け・集計します。



当番を決め、毎回ボランティアを募ります。年に1度はPTAの行事を担う「一人一役」ルールもあり、毎回30人ほどで和気あいあいと作業しています。

1300万点達成について、ベルマーク担当部長の佐々木明子さんは「学校や歴代PTAの役員、保護者の方々のベルマークへの意識の高さ、協力の結果」と話します。メンバーの岸野明子さんも「歴代の努力と工夫の積み重ねで、回収や仕分け、集計のやり方もスムーズになっています。ベルマークの取り組みはこれからも引き継いで行ってほしい」と、次の大台達成に期待しています。

## 実績校が統合して大台

700万点 千葉市立幸町小学校



千葉市美浜区の市立幸町小学校(西村多加志校長・356人)がこれまで集めてきたベルマーク点数の累計が9月に700万点を達成しました。

同校は、1960年代末に入居が始まった大規模団地に作られた学校が、その後の少子化の流れで2度の統合を経て、平成27年4月に新たに幸町小として開校しました。幸町小としての歴史は浅いですが、統合前の学校はいずれもベルマーク運動の歴史を持っており、その実績が重なって大台を達成しました。いまでも年間4万点以上のマークが集まります。

取材した2月7日は仕分け作業日。午前9時、各クラスから2人ずつ選ばれ、ベルマーク活動を担当している企画運営

委員会の皆さんが集まってきます。委員長の穴倉小奈恵さんが率先して動き、三役の丸田由美さん、三膳恵梨子さん、長谷川千絵子さんがサポート。「このマークはどこ?」「こっちにもお手伝いお願い」と声を掛け合いながら作業は着々と進みます。

作業日は年2回で、学習参観会やPTA総会と同じ日に設定。そこでは仕分けのみ行います。あとは各自が持ち帰り、家で集計して明細を記入、決められた日に提出します。「お仕事をされている方も多いので、できる時にできる人がやろうというスタンスでいること」がモットーだと穴倉さんは言います。発送作業とカートリッジ類の集計は委員長と三役の皆さんがします。

「卒業された年配の方や地域の方もマークを学校に持ち寄ってくれます。地域全体がベルマークを集めるのに協力してくれています」

西村校長は委員会の皆さんに「いつも子どもたちのための活動をありがとうございます」と感謝していました。